

# 日本民家園だより

特集「登戸さかの左官さん」

vol.73

納

奉

友  
茂

時  
次  
舟

菊  
次  
舟

舟  
次  
舟

世  
之  
助

負  
吉

米  
吉

文  
吉

辰  
次  
舟

半  
次  
舟

企画展示「登戸さかの左官さん」

2010年7月1日(木)～11月28日(日)

## 登戸の左官

### はじめに

日本民家園では、移築された各民家の関連資料のほか、建物の博物館としてさまざまな建築用具を取蔵しています。今回の展示ではこれらの中から、川崎市多摩区登戸の伊藤芳信氏の寄贈資料を中心に、左官の道具をご紹介しますことにします。伊藤家はこの地で、江戸時代より代々左官を営んできました。

左官とは、建物や塀の壁を塗る職人のことです。「左官」という言葉の語源は、たとえば『広辞苑』には「宮中の修理に、仮に木工寮の属（サカン）として出入りさせたから」という説が紹介されていますが、異論も多く、詳細は不明です。ただし、左官が大工とともに日本の建築を支える重要な職人であったことは間違いありません。

### 登戸の左官

津久井道（世田谷町田線）に沿い、物資の集散地として商業的に栄えた登戸は、職人の町でもありました。石屋・畳屋・建具屋など建築関係の職人が目立つ中、特に多かったのが左官です。明治6年（1873）の『数目取調書上帳』（市民ミュージアム蔵）によれば、当時244戸の登戸村に7軒もの左官屋があったことがわかります。弟子を含めれば職人の数はさらに多く、仕事の急増した関東大震災後は一時40人もの左官職人がいたそうです。

登戸の左官は腕が良く、特に、技術を要する土蔵造りでは関東一円に名が知られていました。土蔵造りの生糸工場がはやった八王子、店舗として土蔵が使われた日本橋など、職人たちは多摩川を越えて遠方まで仕事に行きました。川向こうの世田谷でも土蔵となると登戸の職人が呼ばれ、いくつかの倉にその名が残っています。こうした職人たちの便を図るため、登戸の渡船を左官組合で運営していたこともありました。

建築の職人たちは聖徳太子を信仰していました。登戸の光明院には聖徳太子像を祀る太子堂があります。職人たちで作る登戸太子講組合では、毎年1月22日に太子堂で太子祭を行い、かつてはその後の総会でその年の手間賃の取り決めを行っていました。現在、こうした取り決めには組合は関わっていませんが、懇親団体として



上：安藤家内蔵に残る線描き（明治28年）  
「稲田村登戸 左官松五郎」

下：大場家の土蔵の棟札（文化12年）  
「多摩郡登戸村 左官棟梁要蔵」

写真提供：世田谷区教育委員会

旅行会や慰霊祭を行っています。太子堂脇の慰霊碑は太子講組合で建立したもので、ここには左官や大工をはじめ、亡くなった職人たちの名が刻まれています。

### 左官の道具

左官道具の中心は、なんといっても鏝です。塗る場所、工程に応じて、形、材料、大きさ、硬さ、さまざまなものを使い分けられました。

形は大きく分けると、柄が鏝台の端に付く「元首鏝」と、鏝台の中央に付く「中首鏝」の2つがあります。江戸時代まで使われていたのが元首鏝で、中首鏝の方は20世紀に入り、モルタル壁用に考案されたものです。



光明院（多摩区登戸）の太子堂に奉納された鍍絵の額

つぎに材質に注目すると、木鍍と金鍍に分けることができます。このうち金鍍は、鉄からステンレスへと次第に変わっていきました。厚さ硬さもさまざまですが、一般的に仕上げに近づくにつれ、滑りや切れの良い硬いものが使われます。

このほか特殊なものとしては、鍍絵に使われる柳葉鍍、土蔵の窓まわりなどに使われる面引鍍などがありました。

登戸の職人たちはかつて、目黒まで道具を買いに行っていました。目黒には鍍専門店が3軒ほどあったそうです。

### 壁を塗る

壁塗りの作業は、木舞という下地作りからはじまります。割竹を細縄で格子状に編み上げたもので、専門の職人が現れるまではこれも左官の仕事でした。

この上に土を塗っていくわけですが、一般的に、大きく分けると下塗り・中塗り・上塗りの3つの工程がありました。

下塗り中塗りに使われるのは、粘りけの強い「荒木田」と呼ばれる土です。登戸周辺では高津区の溝の口から二子あたりのものが一番使いやすかったそうです。ただしこの土がそのまま使えるわけではなく、ワラを混ぜ、水で練って半年から1年寝かせ、ようやく壁土として使うことができました。

通常の農家では中塗りで終わるのが一般的でしたが、土蔵などでは漆喰で上塗りをしました。漆喰とは、石灰に海草で作った糊を加えて練り上げたもので、土蔵の場合、11回ぐらい塗り重ねたそうです。途中乾燥期間も取りますので、1棟の土蔵を塗るのに3年ぐらいかかりました。

### 鍍絵

漆喰を材料に、鍍で立体的に仕上げた絵を「鍍絵」といいます。江戸中期に盛んになり、祭りの出し物や蔵などの装飾に使われました。

これを芸術に高めたのが、江戸から明治にかけて活躍した伊豆の長八（文化12年～明治22年）です。伊豆に生まれた長八は、左官の修行をしたのち江戸に出て狩野派に絵を学び、鍍絵の技法を大成させました。

この長八の元には多くの弟子が集まったため、彼の技術的影響は広く全国に及びました。登戸稲荷神社に残る鍍絵も、長八の影響下で作られたものの1つです。西側の壁には波と竜が描かれていますが、これが長八の弟子・江戸芝の正太郎の作とされています。かつては北側と東側にも正太郎の鍍絵がありましたが、関東大震災で崩れ、現在のものはその後、登戸の左官たちが奉納したものです。

川崎市内にはこうした壁面の装飾として作られたもののほか、いくつかの社寺に鍍絵の奉納額が残されています。（渋谷卓男）



登戸稲荷神社（多摩区登戸）に奉納された鍍絵の額（大正6年）

※この頁で紹介した棟札と鍍絵は、企画展では写真パネルで展示します。

# 伊藤芳信氏寄贈<sup>さかん</sup>左官道具



四半鍬



レンガ鍬



木鍬



富士型引鍬



ヒビツキ鍬



面引鍬



切付鍬



目地鍬

日本民家園だより vol.73 発行：平成22年7月1日

川崎市立日本民家園 URL <http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm>  
〒214-0032 川崎市多摩区柁形7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652 交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分  
開園時間 [3~10月]午前9時30分~午後5時 [11~2月]午前9時30分~午後4時30分 入園は開園30分前まで  
休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月28日~1月3日  
入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料